

佐々木和貴編

『演劇都市はパンドラの匣を開けるか』

(ありな書房・二〇〇二年)

桑島 秀樹



本書は、一七世紀を中心とするイギリス表象文化を探究した「初期近代イギリス表象文化アーカイヴ」シリーズの第二弾である。この著作は、アートとサイエンスの錯綜した奇想世界を豊富な図版を駆使しつつ示すという点でも、シリーズ前作の末廣幹編『国家身体はアンドロイドの夢をみるか』(二〇〇一年五月刊)はもとより、ありな書房が刊行してきた一連の奇想表象シリーズに正統に連なるものとみることができる。

それでは、本書にみられる特徴とは何か。この問いに応ずるに先立ち、まずはシリーズ前作との共通特徴の列挙を試みることにしよう。一、「初期近代イギリス」の範囲を——「啓蒙の世紀」たる一八世紀以前の時期である——「一七世紀イギリス」にいわば禁欲的に限定したうえで考察を深化させていく点。二、若手研究者を含む多様な執筆陣が最新の研究動向

に目配りしつつ斬新な切り口から問題を設定・解明していく点。三、さまざまなメディアを通じて立ち現れてくる現代の文化的・社会的な諸課題への接続可能性を意識的に模索している点である。

こうした美点をそなえた邦語による一七世紀イギリス表象文化論に関する著作が、二作続けて刊行されたことで、日本における当該分野の「底上げ」がいっそう促進されることはまちがいあるまい。既刊二著に質的に劣らないシリーズ第三弾の刊行——本書巻末において予告されているが、未刊行である——が待たれるところである。それゆえ、本シリーズの続編(その刊行計画が頓挫しなければ、だが)への期待も込めて、以下いくつかの疑問を提示しておく。それら諸点は、いずれも上記三つの美点の裏面に、ぴったりと寄り添っている問題群だといってもよいだろう。

一、「未踏の」分野あるいは「死角となっていた」分野としての「一七世紀イギリス表象文化」だけを限定的に論じることと執着するあまり、従来一八世紀を舞台に論じられてきた問題系の単なる遡及的な適用に陥っていないか(より「古い」世紀における「系譜探し」のみで満足してはいないか、ということ)。二、近年の研究動向——二次文献による——に敏感になり過ぎ、原資料読解時にそのバイアスが過度にかかってはいないか(イギリス本国の研究を過度に重視し紹介する「啓蒙」的な作業で満足してはいないか、ということ)。三、「最新の」特殊な情報技術用語による説明ないしは「最新の」社会理論概念の適用によって、かえって問題系のひろが

りを局限してはいないか（アクチュアリティを希求するあまり考察対象あるいは考察事態の鮮明化よりもむしろその軽薄化をまねいてはいないか、ということ）といった疑問である。ここにさらに、四つめとして、現代思想の用語や理論による分析と同時に（あるいは、むしろそれより前に）、同時代の周辺ヨーロッパ諸国における「一七世紀表象文化」全般との比較研究という基本的な視座をも導入すべきではないか、といういささか贅沢な期待・要請もくわえておきたいと思う。

とはいえ、本書に寄稿されている個別の論考は、それぞれに十分に示唆に富むものであることはすぐに付けくわえておかねばなるまい。シリーズ前作と同様に、本書の巻末には、「バンドラの匣から飛び出したアーバン・ファンタジーたち——アーカイヴ後口上」（本書二八五～二八九頁）——本書のタイトルが示すよう「演劇」がさまざまな表象の比喩となっている——と題して、責任編集者の佐々木氏の手により、各論各章それぞれの論点が簡便かつ的確にまとめられている。したがって、ここでは、評者が各論をただ漫然と概括・紹介するような愚は避けることにする。かわりに、評者自身が各論のなかで特に興味をひかれた論点を、以下二、三記しておくことにしたい。

まず南隆太氏の論考「人形劇の政治学——初期近代イギリスにおける娯楽」（本書第二章）。この論考は本書のなかでは例外的に一七世紀から一八世紀にわたる長いスパンで考察がなされている。ここでは、一七、一八世紀のイギリスにおいてどれほどポピュラーかつ重要な庶民的娯楽であったかを今更

ながら確認できる。と同時に、こうした当時の人形劇を観る者たちのまなざしの二極化という南氏の指摘に対し、強く得心がいくであろう。具体的にいえば、一八世紀のロンドンでは「同じ劇場内に存在する二種類の観客——「上品なボックス席」対「野卑な天井桟敷」——」（八八・八九頁）が存在していたという事実の出来が確認される。つまり、同じ「芸術」——近代的な自立的「アート」概念がようやく生まれ出ようとしていた時期なのだが——に対する享受姿勢のうちに二様のあり方が生じていたということだ。こうした事態はまた、美学的見地に立てば、高級および低級文化の混淆、ないしは「趣味」（本書八四・八五頁）の多様化の問題とみることができる。

次に、小野功生氏の論考「ロンドンは燃えているか——反教皇主義とプロテスタント国家」（本書第三章）。ここでは、「コラント」と呼ばれたオランダ由来の初期新聞の出版・頒布が、一七世紀イギリスにおける「プロテスタント（国民）国家」の創生に寄与した経緯が詳述されている。ここで注目し値するのが、一六四一年一〇月のアイルランドでの「アルスター叛乱」の報道に関する記述である。カトリック教徒たる「残虐で、野蛮で、悪魔のような」アイルランド人（本書一一八頁）が、プロテスタントのイングラランド人に対しておこなった「蛮行」が過剰に都市ロンドンの人々に喧伝された。この際「コラント」が政治性をなす情報戦略メディアとして多大な効果を発揮したことが恰憫に指摘されている。さらにまた、このように捏造され広範に流布したアイリッシュ・カトリックの「残虐性」が、同じコラントという新しい公共的媒

体を通じて、スペイン人による新大陸のインディオに対する蛮行といわば「二重写し」となるのかたちで提示された（本書一六・一二〇頁）とのさらなる指摘を読むに至っては、なるほど深く感心することになる。アイルランドとスペイン領新大陸とは、このように、反ローマ、反カトリックという旗印のもと、イングランドの「植民政策」という観点から支配層の関心の的になっていったのだった。こうした事実を、小野氏は端的に、コラント紙掲載の「アイルランド・ニュース」（一六四〇年代頃刊行）の挿絵と、ラス・カサス『インディアスの破壊についての簡潔な報告』の英訳版『インディアンの涙』（二六五六年刊）掲載の挿絵との併置によって、一目瞭然のもとに示唆してくれている（本書一一五頁）。

さて最後に、圓月勝博氏の論考「スチュアート朝リゾート空間の詩学——ロンドンとエプソムの流動するトポグラフィ」（第五章）における、「一七世紀イングランドでの「エプソム鉱泉ブーム」の話題にもひと言ふれておきたい。圓月氏自身も指摘するように、南西イングランドのリゾート地バースを問題の中心に据えて、初期近代イギリスにみられたリゾート空間の生成あるいはレジャー概念の発達を語ることには、「いまや定番となった感」（本書二〇八頁）がある。このさい議論の前提となるのは、富裕なブルジョワ層の闊歩する一八世紀ロンドン社会であった。しかし、圓月氏によれば、一七世紀の「情報通」であった二人の日記作家、ジョン・イーヴリンならびにサミュエル・ピープスがしばしば言及する鉱泉リゾートは、バース以外の二箇所、すなわちターンプ

リッジとエプソムだったという（本書二〇七頁）。今ではロンドンのほんの郊外にすぎないエプソムは、当時馬車で三時間ほどの距離——一四マイル離れている——にあった。圓月論文を読んで気づくのは、一八世紀から一世紀ほど考察視点を遠くにズラしてみるだけで、ずいぶん違った表象風景が現前してくるということだ。そこには、この初期近代イギリス表象文化アーカイヴ・シリーズの真骨頂——わけでも一七世紀に焦点をあてて考察を徹底させるといふその戦略——が如実にあらわれている。

圓月氏の引く、ジョン・オーグルビー『ブリタニア』（一六七五年刊）における一七世紀ブリテンの「ロード・マップ」（本書二二頁）が教えてくれるのは、めくるめく変化をともなっている「国家身体」的な表象感覚であろう。たしかにこの「ロード・マップ」は、イギリスという身体を、ロンドンという心臓から全身に向かって伸びる、張りめぐらされた血管網の視覚化のようにも見える。本書は、こうした意味でもまさに、シリーズ前作と地続きの著作である。したがって、われわれに求められている本書を前にしての読書姿勢とは、第一作と一緒に机のうえに並べ、ページを繰る手を行きつ戻りつさせながら、眼と脳とをその愉楽に陶酔させていくがごときマナー（作法＝仕方）なのかもしれない。

（くわじま ひでき・美学／芸術学）

